

1. 調査目的等

小学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証やその改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

ONRTの学校平均偏差値(国語・算数)を1ポイントアップさせる。(50 → 51P)
 ONRTの「アンダーアチーバー」の児童数を減少させる。(国語17% → 10%、算数24% → 17%)

3. 指標にむけての取組

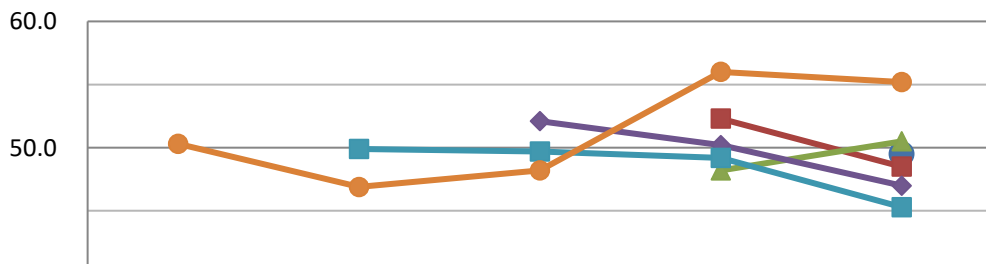
- 意図的・計画的な「かく」活動を設定し、積極的評価を行う。
- 基礎・基本の内容を確実に習得させるために、形成的評価を実施し確実に補充を行う。
- 算数の重点単元を設定し、少人数分割授業を実施する。

4. 調査結果

※学校平均5年間の推移 (標準偏差値50に対して)

年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
本校(A)	50.4	49.9	51.7	50.8	50.0
嘉麻市(B)	50.8	50.7	51.5	51.4	51.1
(A) - (B)	-0.4	-0.8	0.2	-0.6	-1.1
標準偏差値との差 (A) - (50)	0.4	-0.1	1.7	0.8	0.0

各学年の推移



	27年度実施	28年度実施	29年度実施	30年度実施	元年度実施
元年度1年生					49.5
元年度2年生				52.3	48.5
元年度3年生				48.2	50.5
元年度4年生			52.1	50.2	47.0
元年度5年生		49.9	49.7	49.2	45.3
元年度6年生	50.3	46.9	48.2	56.0	55.2

5. 各学校における分析

○無答率は、国語・算数ともに、減少している。このことから、算数科1単位時間において、自分の考えやふりかえりを「かく」活動及び全校で日記や作文指導等を継続して行ってきたことは、考えを表出する力をつける上で有効だったと考える。

○算数科では、最重点学年として取組を進めてきた3年生において、3.6ポイントの伸びが見られた。このことから、専科教員を各学年に配置し、複数体制による少人数分割授業を行ったこと、家庭学習等における繰り返し指導を徹底して行ったことは、有効だったと考える。

○標準偏差値50に満たない学年が、国語科において3学年、算数科において4学年という結果であった。1単位時間における指導の在り方の見直しと改善、低学力児童の補充学習、個に応じた指導の工夫が課題である。

6. 各学校における今後の取組

○自分の考えを「かく」活動の更なる充実を図り、児童に必ず「かく」という意識づけの定着を図る。また、かいたものを適切に評価していくことにより、「かく」ことへの意欲及び表現力の向上を目指す。

○算数科においては、全学年に専科教員を配置し、複数体制で指導を行っていく。本年度は、主題研修とも連携を図り、1単位時間における指導の在り方の見直しを行っていく。また、ひまわり先生の活用を進めるとともに、形成的評価後の補充学習等を通して、基礎学力の定着を図る。

○朝の活動の時間に、鍛ほめ福岡メソッド「いなちゃんパワーアップタイム」を設定し、学力の根源をなす非認知能力(学ぶ意欲・自己肯定感・協働する力等)の育成に努める。

○家庭学習による反復学習を継続する。また、学力や学習意欲に課題がある児童には、低学力の克服も含めて、放課後の個別指導を行っていく。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎今後の取組を具体化し推進することができるように、特に、次の3点について指導助言及び支援を行うとともに、周知徹底できるように継続的に指導する。

◆嘉麻市学力向上推進委員会に基づく学力向上検証改善委員会を開催し、単元テスト評価後の個に応じた習熟度別指導を取り入れた指導方法の工夫を推進する。そのために、習熟度別指導の単元づくりや個に応じた補充プリントの活用の仕方について指導する。

◆嘉麻市学力向上全体構想に設定した思考を伴う「書く(かく)活動」や目的のある「話し合い活動」を核とした授業づくりを推進する。そのために、校内研修での授業観察指導を実施したり、「学力向上に向けた授業づくりの8つのポイント」や「書く活動ポイント9」を活用することができるように指導助言や支援を行ったりする。

◆学力の根源をなす非認知能力の育成を推進する。そのために、「鍛ほめ福岡メソッド」の仕組みを機能させるよう指導助言を行う。